卒業にあたって

渡邉治樹

先日、グローバル地域文化学部をかろうじて 4 年で卒業し、同志社大学体育会航空部を卒部いたしました。

私が航空部に入部したきっかけは新勧期間に木曽川で行われていた体験搭乗会です。初めてグライダーが飛ぶ瞬間を見た時は本当に感動したことを今でも覚えていますし、知らない人たちに連れられて岐阜県まで来たという不安も忘れてしまいました。 そして、その体験搭乗会でグライダーに魅せられ、航空部に入部してから早 4 年が過ぎました。初めてグライダーで空を飛んだあの時の高揚感をいまだに思い出します。

OB の皆様には、私が新入生の時、新歓コンパで顔に包帯を巻いていた新入生を覚えていらっしゃる方もおられるのではないでしょうか。コンパ前に自転車で熱中症になって倒れ、そのまま病院からコンパ会場に直行したためあのような姿になってしまったのですが・・・この事故でもわかるように、私はおっちょこちょいでたくさんのご迷惑をおかけしました。皆様のサポートなしでは部活を続けられなかったと改めて思います。今まで温かく見守って下さり本当に感謝しております。

4 年間を振り返って、フライトや合宿の思い出ももちろんですが、同志社小学校とのイベントや新勧での様々な企画、そして必死になったドライバー養成の思い出など色々な思い出が蘇ります。思い返せば、航空部のおかげで本当に楽しく学生生活を送ることができたと実感しています。そして同時に、時の流れの早さを痛感しています。ただ、活動の途中、留学や就活などで部活を離れ、4 年間部活動に全力を注ぐことができなかったことが今思う後悔です。

教官方、OB の皆様、先輩、同期、そして後輩達、本当にありがとうございました。特に後輩達は、私たちが抜けてこれから部員が少ない中での活動となりますが、頑張ってください。

私事ですが、これからは貨物系の航空会社で働くことになりました。勤務地は成田空港です。縁あってこれからも飛行機のそばで働くことができますし、航空部で培った経験が社会人として活かせると信じています。重ねてとなりますが、航空部の皆様、今までお世話になり本当にありがとうございました。これからは、新 OB として航空部を支えていければと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

佐藤比奈子

4 年間の振り返りということで、何を振り返ろうかとここ数日頭を悩ませていた。というのも、私は3回生の7月を最後に合宿に参加しておらず、ミーティングへの参加も中途半端となり、はたして翔友に書く資格があるのか怪しいからである。同期や後輩に申し訳ないと思いつつ、けれども航空部が私の大学生活とは切っても切り離せない存在であるのも確かであるので書くことを決めた。航空部では良いことも悪いこともたくさんの思い出があるが、せっかく書くなら楽しく、そして他の人が覚えていなさそうなことがいい。考えた末、私のスマートフォンに残されている「木曽川らしからぬ写真」について書くこととした。

この写真を撮ったのは、2014 年 9 月 11 日であった。私が 1 回生のときの、9 月合宿半ばの日で

ある。その日は午後から雨が降るということで撤収し、雨は一瞬降ったものの、すぐにまた晴れるという訓練としては不運な日であった。しかしながら、再びランウェイに出るには微妙な時間で、連日訓練が続いていたこともあり、午後からの訓練は無しになった。思いがけず暇ができたので、一回生のうち数名で、この付近を探索しようという話になった。どういう道だったか正確には覚えていないが、宿舎を出て、土手を滑空場とは反対方向に歩いていったと思う。昨日までの訓練の話とか最近はまっている歌の話とか他愛ない話をしながら、方向性も決めないまま何となく進んだ。途中で土手を降りたが、そこは草が好き放題に伸びていてひどく歩きにくかった。しかし、歩きにくさがかえって冒険を思わせ、人知れず私はわくわくした。スタンド・バイ・ミーみたいだなと思った。適当に歩くうち、開けた場所へ着いた。広い芝生の中に木がぽつりぽつりと立っていて、ここまでの疲れか、夏の空気がそう思わせるのか、そこだけ外国のように綺麗だった。上を見ると、いかにも夏らしい澄み渡る空と、遠くに入道雲が見えた。毎日この空を飛んでいて、これからも飛ぶのだと感慨深かった。あのときの私が一番、合宿を楽しんでいたし航空部が好きだった。

他の人が書くかもしれないが、私が２回生のときに同志社航空部は様々な困難にぶつかった。それを引きずるように３回生の半分を過ごし、積み重なった疲弊や院試卒論等の理由で４回生は活動にあまり参加しなかった。航空部において模範生とはいえない私であるが、入部自体は後悔していないように感じる。航空部に入らなければ出会えなかった人もいる。航空部でなければ体験できなかったこともたくさんある。それはフライトといった活動そのものもあるけれど、困難な状況への対処法とか将来につながる経験のほうが多い。これを読むほとんどの人が知っている通り航空部は他の部活やサークルと比べて、精神面でも金銭面でも負担が大きい。退部したいと思う時はきっと来るだろう。私もそう思っていた。

しかし、卒業を間近に控え、心が落ち着いているからこそ言えるのだと思うが、結果として辞めなくてよかったとは思う。私の立場で後輩に対し辞めないでほしいとは軽々しく言えないが、どんな形であれ退部しなかったことで得られたものはある。退部していれば、少なくとも３回生の７月までは頑張っていたのが無駄になり今の１回生と話すこともなかっただろう。遠い将来に、今の航空部の友人と集まって昔話ができるなら、充分恵まれた学生時代だったと思っている。

藪　聡子

私は大学四年次を一年間休学、休部したため航空部での活動は三年間でした。「予想もしないことが起きたけれど、とにかくやるしかない」そんな局面が航空部では幾度となく訪れます。たまらなく逃げたくなっても逃げられない、そんな中で得た経験は後になって計り知れないほどの財産になると、休部していたこの一年間で気が付き始めました。

思い返せば、真夏の蒸し暑い午後、草むらで四六時中汗を流して私は一体何をやっているんだろうと思う時もありました。そんな瞬間でさえ、今となっては大切だったと考えます。ネガティブな気持ちは何よりも自分が真剣に何かに取り組んでいるという証拠だと思います。怒られて悔しいの

は、自分が真剣に考えていたからで、てきとうにやっていたならば怒られたところで心に響きません。航空部の活動を通して、ネガティブな感情をいかに自分の原動力にできるかが重要だと学びました。また、そうするためには、自分を客観視する必要があります。主観に振り回されず、事実のみを咀嚼することで今やらなければいけないことが見えてきます。簡単なことではありませんが、自分と向き合い、そして必要な時は周りに頼る力、その勇気も組織の潤滑油であるコミュニケーションの一つだと改めて学びました。

競技については、三年次の関西副委員長をやっていた際のことが強く印象に残っています。大会を運営する立場を経験した新人戦、役員として赴いた全国大会、どちらも不安で仕方なかったことを今でも覚えています。新人戦の初日に、大会を支える者が不安がっていては選手はどうすればいいのかと教官に指摘され、確かにそうだと思いました。分からないことはもちろん助けを求めますが、せめて見た目だけでも周囲に不安を与えないよう堂々としていようと決めました。新人戦は天候に恵まれず何とか競技を成立させることが精一杯でした。そんな状況の中で、最後まで協力していただいた選手の皆さん、教官方、大会役員に感謝しています。全国大会では関東の学生と一緒に毎日の本部設営と撤去、広報など大会運営に参加しました。五日間という短い期間でしたが、終わる頃には帰るのが名残惜しくなるほど充実した日々でした。

三年という月日を通して思うことは、“当たり前”のことがいかに恵まれているかに気が付くのはいつだってそれを失ってからであったということです。部員がいること、部活として活動できること、グライダーに乗れることなど、昨日までの“当たり前”はいとも簡単に水の泡になり得ます。だからこそ、今という時を噛みしめどんなことが起きても強くしなやかに進んでいきたいと思います。今までありがとうございました。

前田一貫

昨年度で卒部となります、前田です。1 年の振り返りというよりは4年間、卒部までの振り返りをして感慨に耽ろうかと思います。

同志社大学の入学が決まった際、何らかの部活動に入ろうと模索しました。そんな中、偶然見つけたのが航空部でいくつかの部活動と悩みましたが結果として当部に入部することとなりました。実は私が入部した時の同期は 16 人もいました。新たな世界に足を踏み入れ期待と楽しみで無我夢中に部活動になじもうと試みた 1 回生。そのメンバーで部活動を行っていましたが日に日に部員は減少。会計の松崎も含めいくつものトラブルシューティングに追われた 2 回生。副将になって初めての仕事は当時の部長先生への謝罪でした。3 度にわたる学連機の破損、福井宿舎の火事や同期とのもめ事、その他学連と大学に対する様々な手続きに関する不備、思い返せば大変な年だったなと実感します。この頃から部全体として、なにかわからない、そこはかとない重苦しい雰囲気が流れ始めたような気がします。その重苦しい雰囲気がせっかく入部してくれた 13 人の後輩に伝わってしまったような気がしていてやるせない気持ちでいっぱいです。また、同時に先輩方も辞めていき、頼るすべもなく主将としての 1 年をかけぬけることになった 3 回生。どんなルーティンがあるのか

も分からず流れに身を任せるままでした。ただ 2 回生までに必死に外参していたこともあり、幸いにも他大の仲のいい学生とコミュニケーションをとりながら 1 年間これといって大きな問題はなく過ごせたかと思います。それでもやはり合宿準備の遅れなどで学連の教官にはご迷惑をおかけし、部全体としては重苦しい雰囲気が晴れず、3 回生が終わるころには実働する部員はだいぶ減っていたように感じます。もっとみんなに頼ればよかったのか、もっとみんなに負担をかけないようにすべきだったのか正解はいまだにわからないままです。しかし過去を思い返して良いことはないと考え、二度と後輩たちにこんな思いをさせるものかと誓い部活動に励んだのが 4 回生です。正直フライトに気持ちを向けることは出来ていなかったと思います。それでも部という組織を運営していくという視点で最も充実していたのは、この最後の 1 年でした。機体損傷ほどの大きなトラブルも特にはなく、明るい部員が入部してくれ、ほぼすべての合宿である程度は円満な運営ができ、4 年目にして初めて部が成長していくのを感じられました。そして私自身としても周りを見る目が養われ大きな成長ができたように思います。後輩にも信じてもらい、慕ってもらい本当に嬉しかったです。

今後の部員に伝えたいことを 1 つだけ。辞めるのは簡単です。辛いことから逃げるのも簡単です。しかしそれでは何も成長できないと思います、なにより残った部員のことを考えてください。突然異常なまでの量のタスクを抱えることになります。社会に出てもなにより思いやる心が大切なのではないかと考えます、せっかく入部した部活動だと思いますので、最後まで向上心を持って人のことを思いやり最高の成功体験をしてもらえばと思います。最後まで続ければ必ず成功に感じるはずです。最後になりましたが、関係者のみなさま、特に部員各位、本当にありがとうございました。仲間を信じ慕い、大切な思い出にしてください。

松本大輝

この度、無事卒業し新 OB となります松本です。

私は通常の学生とは異なる特殊な例で、2 年という短い間ではありましたが教官や OB の方々、部員の皆様のおかけでここまで続けて来られたと思います。本当にありがとうございました。

航空部二回生、社会学部の四回生として過ごしたこの一年は、就職活動などで中々部活や合宿への参加がしづらい年でもありましたが、とにかく飛ぶことが楽しく感じた年でした。もちろん操縦技量も知識量もまだまだ初心者レベルではありますが、本来人が見ることのできない圧倒的な景色、風の音、操縦桿から伝わる風圧、全てが私を魅力し、またより一層空の世界へと引き込まれていきました。

入部時点で出場資格がなかったため新人戦には出ることができず、また就職活動を終えたあとの、今年度の後半は順調に発数を伸ばすことができましたが相次ぐウインチトラブルもあり初ソロも叶いませんでした。

しかし、この一年でグライダーと空の魅力を全身で、充分に感じることができたことは本当によかったと思っています。この一年があるからこそ、私はこれからもグライダーを続けていこうと思いました。それほど、後ろを振り返ってみると空を飛ぶ楽しさが特に鮮やかに感じられた貴重な時間であったと思っています。

また、部員ではなく新OBとなるわけですが、同期は主将を務め、今年一年を過ごした後輩も基幹戦力として活動することとなります。

つい最近まで現役部員だったOBという私の状況を最大限活かし、部員が必要とする支援・サポートは何なのか、そういったことを考え、これまで以上に部員に寄り添った支援ができるよう努力していきたいと思います。

以前にも寄稿させて頂きましたが、たまたま航空部員と接点を持ったことで遅ればせながら入部することとなりましたが、やはりもっと長い間部員として活動したかったという思いは非常に強く残っています。しかし、OBとしてもできることは数多くありますし、これからも航空部で出会った方々との関係は大切にしていこうと思います。そして何より、ここでグライダーに出会えたことは間違いなく私の人生や世界を一変させました。グライダーを通して空への憧れ、魅力を存分に体感できたこと、この航空部で二年を過ごせたことは本当に幸運であったと思います。

短い間ではありましたが、ありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いいたします。

去年、そして今年　私の思い

2回生 清水美里

今私はこの原稿を妻沼で書いている。全国大会クルー参加の合間に書いているということだ。航空部入部当初の私が見たらきっと驚くだろう。

航空部への入部動機というのは十人十色で本当に様々なものがあるが私の入部動機は新勧時期に展示されている ASK-23 に一目惚れしたというものだ。勿論、体験搭乗もせずに入部を決めるような人間に空を飛びたいという欲求は一つもない。私はただ真っ白で綺麗な機体を外から眺めているのが楽しかった。体験搭乗で初めて空を飛んだときも特にこれといった感慨はなく、初めて見る滑空場という綺麗なグライダーがいっぱいある場所がただ嬉しかっただけだ。

しかし今の私は飛ぶことが非常に面白くて仕方ない、何をしていてももっと自由自在に空を飛べないかを考えていてどこにいても空を見上げている。航空部の用事がなくテスト週間じゃないときの合宿は 10 月以来全て外参（㊟他校の合宿に参加すること）申し込みをした。（結局事故と整備の影響で外参は一回しかできてないのだけども）4 月以降も行けるときは滑空場に行こうと思う。

私は結構心が弱いので、文句を言われたり、欲しいものが買えなかったりすると飛ぶことが嫌になることがままある。しかし索が張りあわされ、少しずつ機体が動き出し、そして急激に加速し宙に浮かぶあの瞬間を味わうとすぐにまた飛びたくなる。この一年はとにかく飛びたいという気持ちが次々と芽生えた一年であった。

来年の目標は、完全に個人的な目標としては 2018 年中にソロ 30 発を貯めたい。お金が間に合うかどうかはかなり怪しいけど…。

もうちょっと部活的な目標としては新人戦での優勝である、折角新人戦優勝経験者からそのノウハウを直接教えてもらえる在学期間が被る最後の世代だったのでその利点を活かしたい、また自分が同じ結果を残せば後輩たちにも新人戦優勝者が在学生にいるっていう強みが引き継げる。今後のためにもこの目標は達成したい。

そしてもう一つの目標は主務会計の両方の仕事をきっちりこなすというものだ。しかし既にもうかなりパンク状態である…。この部内係の仕事が嫌になって飛ぶのも嫌になる、みたいなのが自分の中の最悪のシナリオなので適度に飛んでモチベーションを保ちつつ部内に迷惑がかからない程度に部内係を頑張るのがこの一年の目標である。来度度で慣れると思うので再来年度は航空部が更に発展できるようにするぐらい発展的なことまでしたい。

最後に、一年上の代は谷先輩しかいなく、私の代は同期が大倉一人しかいない。私達三人だけじゃ物事が上手く進まなくて助けて頂かなきゃいけない場面が沢山出てくると思う。そのときはどうかお力添えをして頂きたいです。そしてもう一つお願いがある、私達は未熟なのは重々承知しているが色々なことを考えて行動している。私達が行動しているのを、明らかに間違えていたりしない限り否定したりせず傍から見守って頂きたいです。助けてほしいと言ったり見守ってほしいと言ったり申し訳ないですがどうか来年度も私達をよろしくお願いします。

2回生 大倉久孝

こんにちは。副将の大倉です。今年度も終わり

に近づいています。大学周辺の桜も開花してきました。京都に4年間住んでいますが、いまだに桜の美しさに慣れることはありません。鴨川の桜はもちろん、周辺の桜もそれに負けないぐらいの存在感を出しています。

その時に一年前の自分を思い出しますが、右も左も分からなかったですね。履修登録を誰にも聞かずに三日間ぐらいずっと考えて、だいぶ時間を無駄に使った覚えがあります。「一人でやってやろう！」とあの時は変な意地を張っていました。青春です。

履修登録が終わってから校地をぶらりと歩いていると、航空部という文字が目に入って、惹き込まれました。文字もですが雰囲気がかっこよかったです。それだけで半分ぐらい入部を決めてしまいました。誰よりも変なきっかけだと思います。インスピレーションにすべてかけましたが、間違ってなかったと思います。

航空部は本当に覚えることが多く、独り立ちや13係（㊟ASK-13の分解・組立や点検・整備等の管理などを担当する）など勉強の一年でした。もともと航空関係にはそんなに興味はなく、入部当初は先輩方の話についていくのが大変でした。でも、何回聞いても優しく教えていただけるので、頭がそんなに良くなかった自分でも、しっかり覚えることができました。本当に幸せなことだと思います。

一年間やってきましたが、まだまだ覚えることが多いです。13係の養成や学科試験に向けての勉強、運転免許取得のための勉強などやることはたくさんあります。その中でも特にやっていきたいのが、13係の認定です。去年の冬ごろから車係から変更して、13係を取ろうとしていますが、後縁ピンを入れるのに苦労しています。前田さんにはずっと同じことを言われていますが、なかなかうまくいきません。この間も13と同じような構造のKa-6を組みましたが、ピンが入りません。まだまだ練習が必要かなと思いました。そもそも13係でもなんでも機体を組めるようにならないと、訓練そのものができないため、合宿ができません。今、13係は前田さんしかいないため、在学中に認定を取っておきたいと思います。

と言いたいところですが、新勧を頑張って、新入生を入れないことには合宿どころか活動そのものができなくなるかもしれないので、新勧隊長になったからには両手で数えられないほどの新入生を入れたいです。今年はOBの人からのお金ももらっていますし、新入生に対して、いい環境が整うのではないかと考えています。いろいろな方法で新入生にアプローチし、たくさん入ってもう一度にぎわせたいです。今年も一年よろしくお願いします。

3回生 谷壮大

今年度ふりかえれば様々なことがありました。副将として活動したこと、初めてピストとして合宿を運営したこと。様々な人々に助けられながらでしたが、これらを通して学んだことのひとつに「責任」ということがあります。いままではただ上回生の指示を聞いていればよかったのが、自身が考え、それを周知し周りを動かす。文面にすればたったこれだけのことかもしれませんが、その一つ一つについてくる「責任」は決して小さなものではありませんでした。

また、「連絡することの重要性」も今年度に痛感したことのひとつです。ある連絡を受けたらその

情報をだれに流したらいいのか、この報告事項は誰にどの順番で相談すればよいのか。はじめのころは悩むことばかりでした。自分の考えすぎる性分もあってか、ひとつの情報を自分だけで占有したりしてしまったこともありました。しかしそれでは部が動きません。そんな当たり前のことに気づけた2回生の始めでした。

同志社大学航空部を背負って初めて大会に出たのも2回生の始めでした。久住山岳滑翔大会や新人戦ではグライダーに関わって初めて「競技」となりグライダースポーツの楽しさの再発見ができました。

来年度、僕が主将を務めることとなります。僕が大事にしていきたいと思っているのは「スポーツとしてのグライダーの楽しさ」です。「仕事」や「責任」が重要で活動の前提を成しているのはもちろんのことですが、それのみに忙殺されることでグライダーを楽しむことをわすれてしまう、ということはあってはならないことだし、本末転倒だと感じます。

さらに部の雰囲気として僕らが「空を飛ぶ」部活であることを忘れないようにするのも僕の役割のひとつであると考えています。

もうすぐ新入生が入学し新たな「同志社航空部」がスタートします。自身の「責任」をしっかりとらえ、ライセンスにむけて訓練を重ねていこうと思います。

4回生 森田麻奈未

1年間を振り返ると、涙と感謝の1年だった。航空部生活の第1の目標、自家用操縦士の資格を取得するために、1年生の時から多くの合宿に参加し、同期の中で一番飛んでいた。他大学の合宿にも多く参加した。しかし、私はフライトの間があいてしまうと、前回のフライト技量に戻すまで人より時間がかかってしまう。その結果、自家用操縦士の受験に必要である単独飛行回数が30発に近づいても思うように技量は身に付かず、自家用操縦士の試験を受けようとしていた時期に間に合わなかった。その後、単独飛行回数が同期で一番多かったにも関わらず、気づけば同期にその回数を追い越されてしまっていた。それが、悔しくて悔しくて泣いてもしょうがないけれど、毎合宿、涙を流していた。だから自家用操縦士の資格を取るまで何度も諦めかけた。しかし、その都度教官方や先輩が励ましてくださった。おかげで、諦めず、試験に対するモチベーションを保てた。

ようやく自家用操縦士を受験することになっても、苦悩は続いた。中でも受験合宿はほんとに苦しい10日間だった。受験合宿前までに、自分なりに精一杯勉強したつもりだが、表面だけの勉強で、根本から何がどうなっているのか、きちんと理解していなかったことをとても実感した。合宿中は毎日泣いて、毎日帰りたいと思ったが、応援してくれている皆を裏切りたくないと思い精一杯努力した。そんなこんなで、自家用操縦士の試験は何とか合格できたが、まだまだ勉強不足と感じることが多くあったので、今後も自家用操縦士として知識と技量の向上に努めたいと思う。また、今後受験する部員にも今回の私の反省や学んだことの引き継ぎをしっかりとしていきたいと思う。

航空部生活の第2の目標はASW28で全国大会に出場することだ。私は、まだまだ技量不足でASW28に乗るにはほど遠い。つい先日までASW28に乗ることを諦めかけていた自分がいた。自家用操縦士

の資格を取得することがゴールではないけれど、「自家用操縦士だから上手く飛べる」と期待されて、その期待に応えられない自分が嫌で、自家用操縦士の資格取得後の目標を見失っていた。しかし、今は、昔の私のように、多くの合宿に参加し、少しずつでも良いから技量を向上して、ASW28に乗れるよう努力していきたいと思うようになった。これから先、また諦めたくなることがあるかもしれないが、3年間の航空部生活で多くの人に助けられてきたことを思い出したら、また頑張ろうと思えるだろう。

4回生 西野圭紀

三年間部活動をやってきて主務の仕事や機体の整備等しんどい部分がありましたがその分社会に出る上での基礎が身に付いたように感じます。また天候等の影響で飛べない日が多くあり悲しい時もありましたがその分反骨精神で合宿中に飛ぶ楽しみが増して今まで続けられてきた気がします。

これからは自分のできる限りで部に貢献しかつフライトの技術を上げ楽しみたいと思います。

4回生 山口七海

去年決めた目標は「3回生の夏までにライセンスを取得し、3年、4年次と二年連続で全国大会に出場し入賞すること」である。今年一年でこの目標を達成することはできなかった。一番の原因は計画の甘さではないかと考える。去年一年はざっくりとした計画しか立てていなかった。3年のうちから就職活動の一環でインターンシップに行くことを年初めには考えていなかったりなど、先を読むことが出来ていなかったため計画がうまくいかなかったのではないかと考える。来年度は就活との両立が大変だとは思うがしっかり計画を立てて取り組みたい。

今年度の一番の成果はKa-6Eに乗ることが出来たことだと思う。学生としてKa-6Eに乗ったのは井上翔太さん以来だそうだ。初めて乗ったKa-6Eは、今まで乗った機体とまったく違っていた。オールフライングテールのため、ピッチが非常に効きやすく速度を管理するのが大変だった。また競技機なだけあって舵の効きが良く、旋回するときに自分が思ったところですぐに旋回できると感じた。自校の機体に乗る機会はなかなかないので今後も技術を磨き積極的に乗れるようにしていきたい。

また今年度は主将を務め、主務、会計、学連、体育会などの担当者と協力して運営した。部員が少ないため皆掛け持ちで忙しいが、それぞれの目標や競技に支障がないよう目配りすることを心がけた。昨年の他大学での事故を受け、実際に「空を飛ぶ」ことは常に危険と隣り合わせであり、細心の注意を払わなければ大事に繋がることも痛感した。この事故を教訓に、部員全員の安全に対する意識を高めることを意識した。空を飛ぶ以上、1つでも基本やルールを怠って勝手な動きをすることは命取りになる。そのために空を飛ぶ上でのルールはもちろん、合宿中の規則を周知し、お互いが指摘しあえるような環境作りをした。その結果事故やけがを起こすことなく部員全員で全国入賞を目指して活動できている。一見すると地味ではあるが、安全の上に技術を積み上げることが大切だと考えている。今後も全員が共通認識を持って安全に勝つ部活を作っていきたい。

来年度の目標は夏までにライセンスを取得し、全国大会で入賞することである。来年は航空部生活の最後の年であり、ラストチャンスである。きちんと計画を立て目標を達成できるよう全力で取り組みたい。

編集長独言

最近、HP のブログに掲載された記事に心を揺さぶられた。どうしても全国大会を経験したかった 1 年生（現 2 年生）二人からのレポートである。

昨年度は 2 年続いて 3 月の妻沼に行けなかった。そこで、これからの自分と母校のために、何としても全国大会の会場に身を置き、その場の空気を呼吸し、見ること、聞くことのすべてからノウハウを学ぼうと、自らの意思で他校チームのクルーとなってまで参加した二人の積極性と行動力は、部の沈滞ムードを吹き飛ばし、前途に明るい兆しを感じさせるに十分なものとして私の心に響いた。

スポーツに限らず、何かを継続している組織にとって大事なことは、先輩が残してくれた実績から学び、その上に自分達が得た知識と経験、失敗と成功を加え、ノウハウの厚みを増して後輩に渡してゆくことである。このことが毎年確実に実践される結果を人は”伝統がある”と呼び、その組織は強い。

2 年にわたって後輩を全国大会に連れて行けなかった上級生は、心に痛みを感じているか？自分の教え子達を全国大会に導くことが出来なかった監督、コーチはその現実を重く受け止めているか？

二人の思いを受け入れ、その希望を叶えて下さった九州大学、立命館大学両校航空部に感謝と敬意を捧げる。